

## 「神の意志が堅く立っている」

マルコによる福音書 15 章 1 - 15 節

森島 牧人 牧師

受難週・棕櫚の主日礼拝の今日、与えられた御言葉はマルコ 15 章の「ピラトから尋問される」という小見出しのあるところです。

私たちは毎週の礼拝で使徒信条の告白をしています。その中に「ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け・・・」という箇所があります。ポンテオ・ピラト云々のこの文言が使徒信条にあることには大きな意味があります。この告白には 3 人の個人名が出て来ますが、主イエス・キリスト、その母であるマリア、そして 3 人目がポンテオ・ピラトで、彼はキリスト者でも、主イエスの弟子でもなく、その頃イスラエル統治のためローマから派遣されていた総督でした。彼の名前が使徒信条に入っていることにある大きな意味、それは、この文言を通して、この裁判を含む主イエスの十字架の出来事のすべてが、ピラト総督時代に起こった歴史上の事実であることを明らかにしているところにあります。

この裁判前後の主イエスの受難について、神の御子イエスがどうしてという疑問を抱いてしまうのですが、これはすべて神によって定められたことでした。しかも、私たち人間の罪の結果による受難だったのです。その罪とは何か、今日の聖書では、それは「ねたみ」であったと・・・。聖書に「ピラトは・・・祭司長たちがイエスを引き渡したのは、ねたみのためだと分かっていたからである。」(マルコ 15 : 10) と記されているように、ピラトも、彼らがねたみから、主イエスを告訴していることを見抜いていました。主イエスの受難は人間側の「ねたみ」によるものだったのです。主イエスの十字架にまで繋がったねたみ。他の人より良くありたい、他の人が自分より幸福であることが許せない・・・世界で、社会で、家庭で、日常的にあるこの「ねたみ」というものによって、世界中の殆どすべての争いが生み出されていると言っても過言ではありません。ヤコブ 4 : 5 に「神は私たちの内に住ませた霊を、ねたむほどに深く愛しておられ・・・」とありますが、神の人間への愛は途方もなく大きいのに、人間は愛すること少なく、ねたみの感情の方は豊富に持って、神の前から逃げようとしているのです。

さて、裁判の場面ですが、主イエスを裁きながら、釈然としないでいるピラトの様子が目に浮かびます。ピラトを困惑させているもの、それは主イエスの「沈黙」にあります。私たちにとっても神の沈黙は大きな問題です。神が何を考えておられるのか分からない、神の御心が分からないと嘆きます。沈黙の中に、神が御心をはっきり語っておられるのに、私たちはそれを理解せず、受け入れることをしないのです。この法廷の場面での神の意志は、主イエスの沈黙の中にあり、主イエスの沈黙は受難に向かって歩くという、動くことのない神の意志でした。しかし、神の沈黙が指し示す主イエスの受難の意味を理解しない群衆は、政治的・社会的・直接的なものを欲し、狂うように「バラバを赦し、主イエスを十字架に」と叫び続けたのです。ピラトもまた、その群衆に迎合したのです。

この一週間、私たちは十字架の前に立って、沈黙の主イエスの中にある神の御心に思いを致し、神によって定められた主イエスの受難を如何に告白して行くか、深く考える者でありたいと願うものです。